

Contents

演劇芸術監督 宮田慶子	2	
2014/2015シーズン 演劇 ラインアップ	3	
JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく— IX		
三文オペラ 新訳上演	4	
二人芝居 —対話する力— Vol.1		
ブレス・オブ・ライフ ～女の肖像～ 日本初演	8	
二人芝居 —対話する力— Vol.2		
ご臨終	12	
二人芝居 —対話する力— Vol.3		
星ノ数ホド 日本初演	16	
ウィンズロウ・ボーイ 新訳上演		20
JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく— X		
海の夫人 新訳上演	24	
東海道四谷怪談		28
長塚圭史新作 新 作		32
公演一覧 (1997.10 ～ 2014.7)	36	

2014/2015シーズン 演劇



演劇芸術監督

宮田慶子

Miyata Keiko

豊かな力

2014/2015シーズンの開幕は、ご好評を頂いている「JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—」シリーズの第九弾として、いよいよプレヒト作『三文オペラ』の登場です。おなじみの名曲「マック・ザ・ナイフ」と共に、稀代のヒーロー、メッキースが繰り広げる野望とロマンス、そして終景のドンデン返しで権力の構図を描き出す、不朽の名作です。

続く10月～12月は、シリーズ「二人芝居 —対話する力—」の三作品を上演します。「二人芝居」は文字通り、俳優がたった二人で、台詞、感情、思考、表現のすべてを駆使して“対話”をしながらドラマを紡いでゆく、いわば、演劇の最も基本となる形態です。一作目はデイヴィッド・ヘア作、蓬萊竜太演出『ブレス・オブ・ライフ ～女の肖像～』、二作目はモーリス・パニッチ作、新国立劇場に初登場のノゾエ征爾の演出による『ご臨終』、そして三作目のニック・ペイン作『星ノ数ホド』

には、2013年9月の『OPUS／作品』で高い評価を得た小川絵梨子が演出にあたります。

全身全霊で相手と向き合う濃密な人間関係は、閉塞する現代社会におけるひとつのヒントとなるに違いありません。

15年4月は、研修所修了生の若い才能に注目を頂いているシリーズの第三弾、テレンス・ラティガン作『ウィングズロウ・ボーイ』です。個人の尊厳と家族の絆を描く秀作を、鈴木裕美が演出します。

5月はイブセン作、宮田演出『海の夫人』。「JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—」シリーズも回を重ね、第十弾となります。

続いて6月には、充実した実績を重ねている気鋭の演出家・森新太郎が、中劇場で鶴屋南北作『東海道四谷怪談』に挑みます。

そして7月は、2012/2013シーズンの『音のいない世界で』で、独自の抒情的な世界を作り上げた長塚圭史が、再び、大人と子供が共に楽しめる舞台を立ち上げます。おなじみのメンバーがつくり上げる新作に期待が高まります。

今年度も多彩で多様なラインナップとともに、豊潤で底力のある劇空間の醍醐味をお届けしたいと思います。

〈プロフィール〉

1957年生まれ、東京都出身。新国立劇場演劇部門、芸術監督。

80年、劇団青年座（文芸部）に入団。83年青年座スタジオ公演『ひといきといき』の作・演出でデビュー。翻訳劇、近代古典、ストレートプレイ、ミュージカル、商業演劇、小劇場と多方面にわたる作品を手がける一方、演劇教育や日本各地での演劇振興・交流に積極的に取り組んでいる。

新国立劇場演劇研修所講師・サポート委員。社団法人日本劇団協議会常務理事、日本演出者協会副理事長。主な受賞歴に、94年第29回紀伊国屋演劇賞個人賞（青年座『MOTHER』）、97年第5回読売演劇大賞優秀演出家賞（青年座『フユヒコ』）、98年芸術選奨文部大臣新人賞（新国立劇場『ディア・ライアー』）、2001年第43回毎日芸術賞千田是也賞、第9回読売演劇大賞最優秀演出家賞（青年座『赤シャツ』『悔しい女』、松竹『サラ』）など。上記以外の主な演出作品に、青年座『ブンナよ、木からおりてこい』『妻と社長と九ちゃん』『をんな善哉』、松竹『愛は謎の変奏曲』『恋の三重奏』『ガブリエル・シャネル』、ホリプロ『ノイズズオフ』『エレファントマン』『ペテン師と詐欺師』、パルコ『ふたたびの恋』『LOVE30』、アトリエ・ダンカン『伝説の女優』など。新国立劇場では上記『ディア・ライアー』のほか、『かくて新年は』『美女で野獣』『屋上庭園』を演出。芸術監督就任後は2010/2011シーズン『ヘッダ・ガーブレル』『わが町』『おどくみ』、2011/2012シーズン『朱雀家の滅亡』『負傷者16人 — SIXTEEN WOUNDED —』、2012/2013シーズン『るつぽ』『長い墓標の列』『つく、きえる』、2013/2014シーズン『ピグマリオン』。

Lineup

2014/2015シーズン 演劇 ラインアップ

〈計8演目〉

2014.9

JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—Ⅷ

三文オペラ

作：バルトルト・プレヒト

音楽：クルト・ヴァイル

翻訳：谷川道子

演出：宮田慶子

2014.10

二人芝居 —対話する力— Vol.1

ブレス・オブ・ライフ ～女の肖像～

作：デイヴィッド・ヘア

翻訳：鶴澤麻由子

演出：蓬萊竜太

2014.11

二人芝居 —対話する力— Vol.2

ご臨終

作：モーリス・パニッチ

翻訳：吉原豊司

演出：ノゾエ征爾

2014.12

二人芝居 —対話する力— Vol.3

星ノ数ホド

作：ニック・ペイン

翻訳：浦辺千鶴

演出：小川絵梨子

2015.4

ウィングズロウ・ボーイ

作：テレンス・ラティガン

翻訳：小川絵梨子

演出：鈴木裕美

2015.5

JAPAN MEETS… —現代劇の系譜をひもとく—Ⅹ

海の夫人

作：ヘンリック・イブセン

翻訳：アンネ・ランデ・ベータス／長島 確

演出：宮田慶子

2015.6

東海道四谷怪談

作：鶴屋南北

演出：森 新太郎

2015.7

長塚圭史新作

作・演出：長塚圭史

振付：近藤良平

三文オペラ

新訳上演

New Translation

Die Dreigroschenoper

中劇場

●前売開始：2014年6月21日(土)

●料金 S：8,640円 A：5,400円 B：3,240円

作： ベルトルト・ブレヒト

作曲： クルト・ヴァイル

翻訳： 谷川道子

演出： 宮田慶子

音楽監督：島 健

出演： 池内博之 ソニン 石井一孝 大塚千弘 あめくみちこ 島田歌穂 山路和弘 ほか

企画意図

宮田慶子芸術監督5年目のシーズン、幕開けを飾るのはベルトルト・ブレヒト作、クルト・ヴァイル作曲による傑作『三文オペラ』です。2つの世界大戦を経て、混乱の中にあった欧米で「異化効果」をはじめとする様々な演劇理論を生み出し、当時の演劇界において大きな影響力を持った巨匠ブレヒトの代表作を、「JAPAN MEETS… ―現代劇の系譜をひもとく―」シリーズの第九弾として上演します。

ブレヒト研究の第一人者である谷川道子による新翻訳を、宮田慶子自らが演出を手掛け、猥雑で乱暴で、けれども愛さずにはいられない魅力にあふれた登場人物たちの悲喜こもごもを描き出します。

主役メッキースには、2012年10月『るつぽ』でプロクターを見事に演じきった池内博之が音楽劇に初挑戦、相手役ポリーには、数々のミュージカルに出演し、NYでさらに研鑽を積んだソニンが、5年ぶりに新国立劇場に出演します。ほかにも石井一孝、大塚千弘、島田歌穂らミュージカル界のスターと、あめくみちこ、山路和弘ら演劇界の実力派俳優たちの共演にも注目です。

作品

1728年にロンドンでヒットしたジョン・ゲイ作『乞食オペラ (The Beggar's Opera)』をベースに描かれた音楽劇。1928年、ベルリンのシッフバウアーダム劇場の柿落し公演として開幕、ヨーロッパ中を席捲する大ヒット作となった。

舞台は19世紀、ロンドン。
貧民街の顔役、メッキースは街で偶然出会った少女ポリーを見初め、その日のうちに結婚式を挙げる。ところがポリーはロンドンの乞食の総元締め、「乞食王」ピーチャムの娘だった。ピーチャムは、そんな男に娘はやれないと、ロンドンの警視総監・ブラウンに彼の逮捕を要求する。メッキースと親交があり、これまで彼の悪事を握りつぶしてきたブラウンは、ピーチャムの要求を受け入れるかどうか逡巡する。

折しも女王の戴冠式のパレードが計画されている大切な時期。ピーチャムは、メッキースを逮捕しないのならば、その大切なパレードにロンドン中の乞食を集めてデモ行進をすると、ブラウンを脅す。

これを知ったメッキースは警察の目を盗んで逃走を図るが、愛人の一人ジェニーの密告で捕らえられてしまう。それから数日後、メッキースは愛人の一人ルーシーとポリーの喧嘩がきっかけとなり脱獄に成功、再び街に戻るのだが……。

翻訳家からのメッセージ

谷川道子

新国立劇場では、2005年に「日本におけるドイツ年」の一環として、栗山民也演出、大竹しのぶ主演で、『母・肝っ玉とその子供たち』の新訳を担当させていただいた。

さて今回は、宮田慶子さん演出の『三文オペラ』である。宮田さんは「音楽に寄った音楽劇」というよりは「芝居に寄った音楽劇」を目指したい、と言われる。芝居とオペラと音楽劇。どんな配役になるのだろう。実はひそかに、『三文オペラ』は女たちの芝居ではないかとも思っている。男と女。如何にもメッキースだけが超主役の芝居に見えるが、女たちも実に生き生きと元気はつらつで強い。その女たちが裏切られても惚れて追っ掛けるのが、メッキースだ。気障なダンディで、マッちょなやくざ者。男たちは資本主義の屋台骨を表裏両面で抜け目なくしたたかに支えているかに見えて、実はけっこうドジで間抜けで、ピーチャム夫人やポリーやルーシー、娼婦のジェニーなど女に頼り切ってコミカルな可愛い気もある。ブラウンもピーチャムも。乞食たちも泥棒たちも。ただし「大企業の背後には銀行が控えている。銀行強盗に使う合鍵など、銀行の株券に比べれば何ほどのものでありましょうか」――半沢直樹のようなリアルな啖呵を切って社会の本質を暴露するのはしかし、男のメッキースだ。ヴァイル作曲の音楽も楽しい。したたかな社会風刺の娯楽劇。さまざまなイメージを膨らませる起爆力をもったこの作品が、宮田演出でどう舞台に立ちあがっていくのか、楽しみにしたい。

演出家からのメッセージ

宮田慶子

『三文オペラ』演出にあたって

1928年にベルリンで初演の幕を開けた『三文オペラ』は、その4年後に『乞食芝居』という題名で日本で上演されました。

当時はまだ翻訳台本もなく、千田是也氏がドイツで見てきた上演の記憶をもとに、映画のシナリオを参照しながら再現したとされています。

この芝居が、いかに千田是也氏の目に鮮烈に焼き付き、当時の日本での上演を急ぐ情熱を駆り立てたか……。――まさに、「JAPAN MEETS… ―現代劇の系譜をひもとく―」をそのまま実現したかのような逸話です。

ジョン・ゲイの『乞食オペラ』をもとに、元々はドイツのキャバレーの芸人たちを集めて上演されたこの芝居は、多様な音楽様式と軽妙なドラマで構成されています。

それが、終景の大ドンデン返しによって、享乐的な「ヒーロー一代記」から、巨大な社会構造への抵抗へと姿を変えていき、更にはそれすらシニカルに客観視する、桁ハズレの底力を見せます。

若きブレヒトとヴァイルが、あり余るエネルギーをぶつけて作り上げた『三文オペラ』を、その娯楽性とメッセージ性を柱にして、挑みたいと思います。

三文オペラ

ベルトルト・ブレヒト (1898 ~ 1956)

Bertolt Brecht

ミュンヘン大学在学中に第一次世界大戦に徴兵され兵役に就き、『死んだ兵士のバラード』を書く。22年『夜打つ太鼓』の初演で注目され、クライスト賞を受賞。ミュンヘンやベルリンの劇場でドラマトゥルクとして活躍後、28年、クルト・ヴァイルとともに発表した『三文オペラ』で大成功をおさめる。20年代後半からベルリンで現代演劇の変革を志し、叙事的演劇や異化効果を提唱し、教育劇や音楽劇などを試みる。しかし、ヨーロッパ各地でヒトラー勢力が拡大していく中、反ヒトラー的立場で演劇活動を行うブレヒトの立場は悪化。33年、ついにベルリンから亡命、15年に及ぶ亡命生活を送る。亡命中も反戦運動を続けながら、『ガリレイの生涯』『母・肝っ玉とその子どもたち』『セツァンの善人』などを書き溜める。48年、東ドイツへ帰還、翌49年、妻ヘレーネ・ヴァイゲルとともに、ベルリナー・アンサンブルをベルリンに設立。51年に東独国民賞、54年にスターリン平和賞を受賞。



クルト・ヴァイル (1900 ~ 1950)

Kurt Weill

父親がユダヤ教会の聖歌隊の指揮者だったことから、15歳より音楽理論と作曲を学び始める。

18年、ベルリン音楽大学を退学後、リューデンシャイト・オペラ劇場の指揮者となる。20年にはベルリンに戻り芸術アカデミーで作曲を専攻、次々に作品を発表し、前衛音楽家として耳目を集める。28年の『三文オペラ』成功をきっかけに一躍有名になるが、高名なユダヤ人作曲家であったことから、ナチスの当局から危険視されるようになり、後期の作品の発表時には、コンサートの会場でナチ党员によって組織された暴動が何度も起きた。33年、パリへ亡命。その後アメリカに移住し、ポピュラー音楽を研究、数多くのミュージカル作品を残している。43年アメリカ市民権を取得、オペラ、映画音楽、交響曲を多数作曲し、その楽曲は今も多くのミュージシャンに影響を与えている。

谷川道子

Tanigawa Michiko

1946年、鹿児島生まれ。東京大学文学部・大学院ドイツ文学専攻で学び、九州大学と成城大学を経て、東京外国語大学で2010年に定年を迎え、現在は東京外国語大学名誉教授。卒業論文が「ブレヒトの教育劇」で、修士論文は「ドイツ自然主義+自由劇場運動とハウプトマン」。以来、ミューラーやイエリネク、ビナ・パウシュ等々の現代ドイツ演劇の翻訳・紹介・研究。著書に『聖母と娼婦を超えて ―ブレヒトと女たちの共生』『ハイナー・ミューラー・マシーン』『現代ドイツ演劇の構図』、共編著に『境界の「言語」 ―地球化／地域化のダイナミクス』『劇場を世界に ―外国語劇の歴史と挑戦』『演劇インタラクティブ ―日本×ドイツ』。主な訳書にスポー著『ロッテ・レーニャー ―ワイマール文化の名花』、シュミット著『ビナ・パウシュ ―怖がらずに踊ってごらん』、共訳書に『ブレヒト作業日誌』『ハイナー・ミューラーテキスト集』『ドイツ現代戯曲選30』、レーマン著『ポストドラマ演劇』など。ブレヒト関連では、『ガリレイの生涯』と『母アンナの子連れ従軍記』がともに光文社古典新訳文庫で既刊、この『三文オペラ』と『ソボクレス改作アンティゴネ』も近刊予定。



三文オペラ

宮田慶子

Miyata Keiko

P2を参照



ブレス・オブ・ライフ ～女の肖像～

日本初演
Japan Premiere

The Breath of Life

小劇場

●前売開始：2014年8月3日(日)
●料金 A：5,400円 B：3,240円

作： デイヴィッド・ヘア
翻訳：鴫澤麻由子
演出：蓬莱竜太
出演：若村麻由美 ほか

企画意図

新国立劇場では、2014/2015シーズンにおいて、現代の良質な二人芝居を三人の若手演出家が演出する、シリーズ「二人芝居 ―対話する力―」を企画しております。

その第一弾は、英国の劇作家デイヴィッド・ヘアの『ブレス・オブ・ライフ ～女の肖像～』です。

2002年にロンドンで上演されたこの戯曲は、マデリン役にマギー・スミス、フランシス役のジュディ・デンチ、2大女優の共演であつという間に話題となり、当時のウエストエンドでのストレートプレイの興行記録を塗りかえました。

妻と愛人が異なる人生観をぶつけあう対立劇でありながら、最終的にそれぞれの新しい人生を歩み出す生命力あふれる大人の戯曲を、作・演出家として活躍している蓬莱竜太がどのように演出するか注目です。

東京公演後には兵庫県立芸術文化センター、他での上演を予定しています。

作品

イギリスのとある海岸沿いにあるテラスハウス。
その家の住人であるマデリンの元に、フランシスが訪れる。
専業主婦だったフランシスは現在流行小説家となり、夫の長年の不倫相手だったキャリア・ウーマンのマデリンとの回想録を書きたくて訪れたのだ。
若い新しい彼女ができた夫は、シアトルに行っており、彼を失った妻と愛人二人の対話が始まるのだが……。

翻訳家からのメッセージ

鴫澤麻由子

この戯曲の冒頭には、画家ポール・ゴーギャンの名言が添えられています。それは「Life being what it is, one dreams of revenge.」。拙訳ながら日本語にしてみると「人生とはこういうものであるから、(人は)復讐を夢見るものだ」と言ったところでしょうか。

しかしこの名言、実は続きがあって、「―― and has to content oneself with dreaming.」と締めくくるのだそうです。作家デイヴィッド・ヘアはこの続き部分は添えていませんが、それも訳してみると「――そして夢見ることで満足しなければならない」。確かに、ただ復讐を夢見るというのが、社会の中で、私たち人間ができる精一杯なのでしょう。

さてこの戯曲、二人の女性が登場します。登場するのはこの二人だけ。読み始めた当初、この二人が単に夢見るだけではなく、お互いへの復讐を実行するのかと思っていました。ナイフなどは出てきやしないだろうけれど心理的に相手をネチネチと追い詰めるとか、そんな女の戦いのドラマかと。

ところが復讐はお互いへの同情となり、やがてそれさえも溶けだし、知恵と相互理解という形を見せてくれるのです。最後には何とも言えない清々しさ、爽やかな風が吹き抜けます。その風を感じられるような翻訳を目指したい、と夢見ています。

演出家からのメッセージ

蓬莱竜太

女の戦いである。それも渴いた女二人の戦いだ。この二人は諍うことで刹那に渴きを癒そうとする。
現代に生きる日本人は容易に諍うことも出来ない。渴きを確認しなくて済むように、色々なものが向こうから飛び込んでくる。スマホがある。アプリがある。つぶやくことだって出来る。むしろラインに追われる日々だ。そうやって他人に自分の弱さ醜さ、そして渴きを隠し続けることが出来る。しかしそれらは確実にそこにある。鎮座している。

駅や電車の中を見渡すとディスプレイを無表情にいじっている人数は尋常じゃない。何と繋がり、何を隠しているのか。

この際登場人物の女二人には我々が出来ない分までとことん争ってもらいたい。面白いのはそれぞれが互いの弱点を知りながら争っている節があるということだ。互いが必殺の間合いにいつもいる。スリリングだが精神の体力が現場では必要そうだ。

この渴きの争いの後に「息吹」の風が吹くように。

ブレス・オブ・ライフ ～女の肖像～

デイヴィッド・ヘア

David Hare

1947年イギリス生まれ。劇作家・脚本家・映画監督。
ケンブリッジ大学で学び、70年『スラッグ』でイヴニング・スタンダード新人作家賞に選ばれる。95年『スカイライト』で、ローレンス・オリヴィエ賞受賞。戯曲として『ブルールーム』『エイミーズ・ビュー』ほか。映画でも活躍しており、監督作品として、85年『ウェザビー』がベルリン国際映画祭金熊賞受賞。



Photo : Daniel Farhi

鴫澤麻由子

Tokizawa Mayuko



1971年、神奈川県生まれ。日本大学芸術学部演劇学科卒。
2001年『青春・最終章～僕たちの決算』『ザ・ウェア』で第8回湯浅芳子賞受賞。
これまでの主な翻訳作品は、95、98年、共訳『The Boys ～ストーンヘンジアパートの隣人たち』、96年『モーリー・スウィーニー』、99年『夢の島イニシュマーン』『クローサー』、2002年『ロンサム・ウエスト ～神の忘れたまいし土地～』、02～08年『アラビアンナイト』、06年『欲望という名の電車』、10年『BLUE／ORANGE』、13年『熱帯のアンナ』など。

蓬萊竜太

Horai Ryuta

1999年に劇団「モダン・スイマーズ」の旗揚げに参加。以降、すべての作品の作・演出を務める。劇団の代表作として、『デンキ島』三部作、『さよなら西湖クン』『夜光ホテル』など。
劇団外にも、チーム申『時には父のない子のように』、三田村組『イヌよさらば』『仰げば尊とくなし』『天井』『男の一生』、アル☆カンパニー『罪』、パルコ劇場『ハンドダウンキッチン』の作・演出。戯曲としてフジテレビ『第32進海丸』、TBS『世界の中心で、愛をさけぶ』、CUBE『東京タワー ～オカンとボクと、時々、オトン～』、パルコ劇場『Triangle ～ルームシェアのススメ』、松竹『赤い城黒い砂』、こまつ座&ホリプロ『木の上の軍隊』、WOWOW『パレード』の脚本、映画『ピアノの森』の脚本およびノベライズ、『ガチ☆ボーイ』原作など、多岐にわたり活躍中。新国立劇場では2008年『まほろば』（第53回岸田國士戯曲賞受賞）、10年『エネミィ』を執筆。



ご臨終

Vigil

小劇場

●前売開始：2014年9月7日(日)
●料金 A：5,400円 B：3,240円

作： モーリス・パニッチ
翻訳：吉原豊司
演出：ノゾエ征爾
出演：温水洋一 江波杏子

企画意図

「二人芝居 ー対話する力ー」の第二弾では、カナダの現代劇作家モーリス・パニッチの代表作のひとつ、『ご臨終』を上演します。この作品は 1995 年に初演され、ジェッシー賞(バンクーバー地区年間最優秀演劇作品)を受賞、その後もたびたび上演されている異色の辛口コメディーです。今回はこの作品を、近年その演出力も高く評価され、注目されている劇団はえぎわの主宰、ノゾエ征爾が演出します。パニッチ、ノゾエとも新国立劇場へは初登場です。

東京公演後には全国公演も予定しています。

作品

一人暮らしの叔母グレースから、何十年も音信不通だった甥のケンプのもとに「年齢だ、もうじき死ぬ。」との手紙が届く。取るものも取り敢えず、銀行の仕事を辞めて大急ぎでグレースのもとに駆けつけたケンプ。ケンプはグレースに積極的に話しかけ、世話をし始めるが、グレースはひと言もしゃべらず、ベッドで編み物をし続ける。老婆グレースの寝室で繰り広げられる 1 年以上にわたるふたりの奇妙な共同生活。やがて……。

作家からのメッセージ

モーリス・パニッチ

人がお年寄りに寄せる情愛は避けるに避けられない人類共通の現象のようです。老いや、日に日に激しくなる物忘れや、税金や、汚れた洗濯物や、苛立ちや、老いるにしたがって強くなる死を遠ざけたいという気持ちなどと同じように。

誰かがその人生を終えようとしているのを助けるのは、難しく、手間ひまが掛かり、悲しい作業です。でも、人は誰しも威厳をもって優雅に人生最後のお荷物をおろさなければなりません。無視されたり、追い立てられたりすることなく……。

日本では社会の高齢化が物の見方・考え方に歪を生んでいると仄聞します。『ご臨終』はそんな日本にぴったりの作品ではないかと思います。新国立劇場がこの作品を採り上げてくださるとのこと、たいへん光榮に存じます。この作品の発するユニバーサルなメッセージは太平洋を越えて日本の皆様にもしっかりと届くものと期待しております。

翻訳家からのメッセージ

吉原豊司

モーリス・パニッチは意地の悪い劇作家です。森羅万象を、斜に構えた意地悪な目で冷たく見つめ、そこであくせくと生きるちっぽけで情けない人間を、皮肉とブラック・ユーモアで味付けしながら形象化する、それが彼の作風です。

演出家や出演俳優に過酷な要求を突き付けるという点でも彼は相当に意地悪です。ネタバレになってしまっっては興醒めですので、ここでの詳説は避けますが、『ご臨終』を観ていただければ、彼が演出家や俳優さんに対しどんなに意地悪かが、お分かりいただけると思います。

モーリスは今カナダで一番人気の劇作家ですが、そんな意地悪でシニカルな彼の作風が、日常生活の味気無さにうんざりしている若者たちの持つ閉塞感と共鳴するからでしょう。彼が、カナダ演劇界の新しい旗手だと称されるゆえんです。

でも、日常生活でのモーリスは優しく、人への思いやりのある心暖かい 60 歳です。皆様、この意地悪でありながら、どこか温かみのある作家の『ご臨終』を、心置きなくお楽しみください。

演出家からのメッセージ

ノゾエ征爾

新国立劇場さま、はじめまして。

モーリス・パニッチさま、はじめまして。

そして中年の男と老婆のお二人さま、はじめまして。

「初めての○○」、などというお題もよく見かけるように、初めて体験するものには、心に深く刻みこまれる強いインパクトがあり、その中身は勿論、いいものからそうでないものまで様々ですが、とにかく、今公演は初物尽くしの様相を呈しています。

死や孤独が痛烈に、小気味よく描かれた今作が、お客さまにとっても、良い初めての瞬間がいくつかあるといい、そんな新鮮な体験となることを目指して、この初陣をととても楽しみにしています。是非会場でお会いできますことを。

ご臨終

モーリス・パニッチ

Morris Panych

劇作家・演出家・俳優。1952年生まれ。バンクーバーおよびロンドンで演劇、演技を学ぶ。82年処女作『ラスト・コール』で劇作家としてデビュー。代表作にカナダ芸術界最高の栄誉であるカナダ総督賞を受賞した、92年『地球の果て』、ほかに89年『7ストーリーズ』、2005年『洗い屋稼業』などがある。戯曲を20作ほど発表し、その作品は英米でも広く上演されている。カナダ在住。



Photo : David Cooper

吉原豊司

Yoshihara Toyoshi

翻訳家。1960年早大文学部卒。70年住友商事駐在員としてカナダに渡航。以後40年間カナダに在住し仕事の傍らカナダ戯曲の邦訳、日本戯曲の英訳、日加演劇交流に注力。2000年カナダ演劇対日紹介を目的とする劇団「メープルリーフ・シアター」の創設に参画。2000年マクマスター大学名誉文学博士、02年湯浅芳子賞、07年カナダ劇作家協会終身名誉会員。13年オーダー・オブ・カナダ（カナダ勲章）受勲。『カナダ戯曲選集』（全二巻、彩流社刊）のほか訳書多数。



ノゾエ征爾

Nozoe Seiji

演出家、脚本家、俳優。劇団「はえぎわ」主宰。1975年岡山県生まれ。8歳までアメリカで過ごす。99年、青山学院大学在学中に「はえぎわ」を旗揚げ（全作品にて、作・演出・出演）。2012年、『〇〇トアル風景』で第56回岸田國士戯曲賞受賞。外部公演や映像などでも幅広く活動している。10年より世田谷パブリックシアター主催による、高齢者施設巡回公演も展開。近年の主な演出作品に、モリエール『病は気から』静岡芸術劇場、川端康成『片腕』台湾・東京、猫のホテル『あの女』ザ・スズナリなど。14年2月、本多劇場にてM&Oplaysプロデュース『サニーサイドアップ』（作・演出・出演）、3月には、遊園地再生事業団『ヒネミの商人』（出演）を予定している。



星ノ数ホド

日本初演
Japan Premiere

Constellations

小劇場

●前売開始：2014年10月4日(土)
●料金 A：5,400円 B：3,240円

作： ニック・ペイン

翻訳：浦辺千鶴

演出：小川絵梨子

出演：鈴木 杏 浦井健治

企画意図

“新作戯曲の殿堂” ロンドンのロイヤルコर्ट劇場で2012年に初演され、13年のオリヴィエ賞で最優秀新作プレイ賞を含む4つの賞にノミネートされた話題作を、シリーズ「二人芝居 ―対話する力―」第三弾として取り上げます。

日本初演となるこの戯曲を演出するのは、13年9月『OPUS／作品』の骨太にして緻密な演出が記憶に新しい小川絵梨子。

唯一のものに思える日々の裏には、実は数限りない別の可能性が有るのではないか……。誰もがぼんやりと考え、けれど答えの出ない人生の大きな疑問。同じようでありながら少しずつ変化するシークエンスが繰り返し現れる、その先に見えてくるものは……。

二人芝居の新たな可能性を開拓する、演劇的興奮に満ちたスリリングな舞台をお届けします。

東京公演後には兵庫県立芸術文化センター、他での上演を予定しています。

作品

雨のバーベキュー場で男と女が出会い、付き合うようになり、やがて別れが訪れる。
あるいは、晴れたバーベキュー場で出会い、付き合うようになり、やがて別れが訪れる。
二人は社交ダンスの教室で再会するも、男はすでに婚約している。
あるいは……。
さまざまなパターンを繰り返しながら物語は進行し、やがて二人がたどり着く運命は……。

翻訳家からのメッセージ

浦辺千鶴

この作品でまず印象的だったのは、そこに施されている極めて演劇的でユニークな仕掛けだ。男女の出会いから（ある意味）別れまでの話だが、同じ場面で微妙に異なる展開がいくつも登場する。今この瞬間はただ一つの現実ではなく、多元的宇宙に存在するさまざまな現実の中の一つという量子力学の考え方だ。

こう書くと難しそうだが、目の前で繰り広げられるのは、選択したりしなかったりした過去が導く「自分たち」の姿。つまり、人生は一瞬一瞬別の展開になっていく可能性がある中で、私たちは意識的か無意識的か、現在こうなることを選択してきたわけで、それこそが天文学的確率の出来事だと改めて気づかされ、なんとなく「今」の瞬間が愛しくなる。……と、こんな風に思える作品に出会うと、つくづく芝居好きでよかったと思うのである。

演出家からのメッセージ

小川絵梨子

80年代生まれのイギリスの劇作家による本作は、戯曲として斬新なスタイルを持ち、演劇的遊び心がいっぱいの作品です。しかし奇抜さだけの戯曲ではなく、心揺さぶる物語が繊細に描かれています。古くからの演劇がそうであるように確固たるストーリーが存在しており、且つ、既成概念を超えた新しい語り口でそれが語られています。ある所は守りながらも、ある所は破壊する。その在り方に、演劇に携わる人間として感銘を受けました。新国立劇場で演出の機会を頂けるのは、今回で二回目となります。頂いた機会を大切に、この本がそうであるように、私も、守りながらも破壊する姿勢で作品に挑みたいと思っています。

星ノ数ホド

ニック・ペイン

Nick Payne

2009年、『If There Is I Haven't Found It Yet』でジョージ・ディヴァイン賞を受賞。10年9月にコメディ『Wanderlust』でロイヤル・コート・シアターでのデビュー。現在はペインズ・ブロウ、ロイヤル・コート・シアター、マンハッター・シアター・クラブ、アルフレッド・P. スローン財団の委嘱によって、ノーベル賞受賞の理論物理学者ポール・ディラックについての新作を執筆中。12年1月、本作『Constellations』初演。12年11月にはウエストエンドへと進出し、イブニング・スタンダード賞ベスト・プレイ賞を獲得、オリヴィエ賞新作プレイ賞候補になるなど、大好評を博した。13年8月には『The Same Deep Water As Me』がジョン・クローリー演出で、ドンマー・ウェアハウスにより上演され、今冬にはナショナル・シアターで『Blurred Lines』が開幕することになっている。



Photo : Richard Davenport

浦辺千鶴

Urabe Chizuru

上智短期大学英語学科、東京女子大学文理学部英米文学科卒業。小田島恒志、山内あゆ子両氏に師事。これまでに Bunkamura、パソナ、新国立劇場などからの依頼で多くの作品の下訳を手掛けている。2009年、新国立劇場『シュート・ザ・クロウ』（小田島恒志氏との共訳）で本格的に翻訳家としてデビュー。



小川絵梨子

Ogawa Eriko

2004年アクターズスタジオ大学院演出部卒業。04～05年、リンカーン・センターのディレクターズラボに参加。06～07年、平成17年度文化庁新進芸術家海外派遣制度研修生。10年、サム・シェパード作『今は亡きヘンリー・モス』で小田島雄志・翻訳戯曲賞を受賞。12年『12年～奇跡の物語～』『夜の来訪者』『プライド』で第19回読売演劇大賞優秀演出家賞、杉村春子賞を受賞。近年、『ヒーロマン』『トップドッグ アンダードッグ』『帰郷』『クリプトグラム』など話題作を次々と演出。新国立劇場では『OPUS／作品』を手がけている。



New Translation

●前売開始：2015年2月15日(日)

演出：鈴木裕美

演出には05年に自ら「ラティガン祭り」と銘打ち、ラティガン作品三作を企画、上演した鈴木裕美、翻訳には演出のみならず翻訳家として第3回小田島雄志・翻訳戯曲賞を受賞した小川絵梨子があります。

それはウィンズロウ家の人々だけでなく、世論をも巻き込む大きな論争へと発展していく。

直木賞な作風、言い換えれば、暴力やエロやグロの全くない愉快さ、知的なエンターテインメントとして成立する作品を作る事は、若い彼らに最も高いハードルかもしれません。丁寧に人物や、人物同士の関係性を探り、それぞれの人物がイキイキと動き、語り、面白い物語を紡いでいく様をお目にかけたいと思います。

ウィンズロウ・ボーイ

テレンス・ラティガン (1911～1977)

Terence Rattigan

イギリスの劇作家・脚本家。高等弁務官の家に生まれ、名門パブリックスクールであるハーロウ校からオックスフォード大学へ進学、外交官を目指すも、演劇に興味を持ち、学業を中断して劇作家としての道を歩み出す。デビュー作『涙なしのフランス語』で脚光を浴びて以降、『ウィンズロウ・ボーイ』をはじめ、『ブラウニング・バージョン』『セバレット・テーブルズ』など数多くの戯曲を残す。多くの作品が映画化され、それらの映画脚本も手掛け『超音ジェット機』『旅路』ではアカデミー賞受賞。英国で最も愛される劇作家のひとりとして名高い。



P18を参照

小川絵梨子

Ogawa Eriko

鈴木裕美

Suzuki Yumi

1963年生まれ、東京都出身。日本女子大学卒業。82年、日本女子大学在学中に「自転車キンクリート」を結成。「自転車キンクリートSTORE」を含むほとんどの公演に関わり、『OUT』『第17捕虜収容所』『法王庁の避妊法』『富士見町アパートメント』などを演出。現在は小劇場から大劇場、ストレートプレイ、ミュージカル、ダンスと多種多様なジャンルで精力的に活動中。2011年より個人ユニット「鈴木製作所」を立ち上げ、『ノミコムオンナ』などを製作。最近の主な演出作品に、東京グローブ座／Quaras『フランケンシュタイン』、東宝芸能『宝塚BOYS』『アンナ・カレニナ』、東京ヴォードヴィルショー『パパのデモクラシー』、ホリプロ『アリス・イン・ワンダーランド』、GAGA／Quaras『英国王のスピーチ』、TBS／ホリプロ『サンセット大通り』、グルーバー・ぼる『八百屋のお告げ』などがある。第35回紀伊國屋演劇賞個人賞、第8回／第15回／第18回読売演劇大賞優秀演出家賞、第10回千田是也賞、第33回菊田一夫演劇賞、07年ミュージカル・ベストテン演出家賞、第61回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。新国立劇場では、『たとえば野に咲く花のように ―アンドロマケ―』『エネミー』のほか、演劇研修所の試演会として第5期生『ゼブラ』、第7期生『ぼくの国、パパの国』を演出。



海の夫人

新訳上演

New Translation

Fruen fra havet

小劇場

●前売開始：2015年3月7日(土)

作：ヘンリック・イブセン

翻訳：アンネ・ランデ・ペータス、長島 確

演出：宮田慶子

出演：麻実れい 村田雄浩 眞島秀和 橋本 淳 ほか

企画意図

「JAPAN MEETS… ―現代劇の系譜をひもとく―」シリーズの第十弾として、イブセン作『海の夫人』が登場。宮田演出で上演された第一弾『ヘッダ・ガーブレル』に続き、今回もアンネ・ランデ・ペータスと長島確によりノルウェー語から新翻訳でお送りします。

『海の夫人』は1888年に出版、翌年ノルウェーとドイツで同時上演されました。

自由を求め、海のような強い生命力を秘めた神秘的な主人公エリーダに、幅広い活躍を続ける麻実れい。そして、エリーダを大きな存在で包み込む夫ヴァンゲル役に『長い墓標の列』で力強い演技をみせた村田雄浩があたります。

東京公演後には全国公演も予定しています。

作品

北部ノルウェーのフィヨルドにのぞむ小さな町。

灯台守の娘エリーダは、初老の医師ヴァンゲルと結婚し、先妻の二人の娘ボレッテとヒルデとともに穏やかに暮らしていた。エリーダには、かつて結婚の約束を交わしていた船乗りの恋人がいた。恋人との関係が途絶え、生活が保証されたヴァンゲルの後妻となり愛される日々を過ごしてきたが、生まれたばかりの息子を亡くし、ここ数年は精神が不安定で空虚な生活を過ごしている。毎日海で泳いでばかりいるエリーダを近所の人々は、「海の夫人」と呼んでいた。

そんな中、突然かつての恋人が現れ、一緒にここを出ていこうと言われるエリーダ。自分の意志で結婚したわけではなく、ずっと自由へのあこがれを胸に秘めていたエリーダは、海と同じ引力を持つその男の登場で心揺れるが……。

翻訳家からのメッセージ

アンネ・ランデ・ペータス

新国立劇場から『海の夫人』の翻訳を依頼されたとき、季節外れのサンタクロースが訪れてくれた気がしました。『海の夫人』は、高校のとき初めて読み、深く感動して以来、ずっと一番好きなイブセンの戯曲だったのです。当時は、エリーダと見知らぬ男の、形式にとらわれない純粹で野生的な愛の美しさにとらわれ、作品が展開していくにつれ、「二人が一緒になれるように」と願いながら読んだものです。しかし、新国立劇場から依頼がきてひさしぶりに戯曲を読むと、不思議と登場人物に対して以前とは違う感情がわいてきて、「夫をおいていかないで!」という願いが自分の中にあることに気づきました。なぜでしょう？ 結婚して子どもを持つと異なる視点を持てるのでしょうか？ 年を重ねると「理想」というものをなくしていくのでしょうか？ 同じ作品が、読む人観る人の人生における立ち位置によって、違う作品のようになってゆく。今改めて、いつの時代になっても読者や観客ひとりひとりにまさに話しかけ続ける劇作家、イブセンへの畏敬の念に打たれています。

長島 確

2010年の『ヘッダ・ガーブレル』につづき、ふたたびイブセンの作品に、宮田慶子さんの演出、アンネ・ランデ・ペータスさんとの共訳で取り組めることをとても楽しみにしています。

前回の『ヘッダ』のときは、古典を安易に現代化することなく、でも現代に通じる意味を問い直そうとする宮田さんの方針のもと、アンネさんとの充実した共同作業をおして、奇をてらうわけではない新しい翻訳を用意でき、俳優陣の力も相まって、この戯曲のもつ鋭さと、意外なユーモアを彫り出すことができました。

今回の戯曲も、いまの私たちには重いテーマにもつながる、ちょっと影をもった美しい作品です。前回以上によい翻訳台本を、稽古場に、そして観客のみなさんに届けられるようがんばります。

演出家からのメッセージ

宮田慶子

『海の夫人』演出にあたって

2010年9月、演劇芸術監督の任に就いて第一作目が、「JAPAN MEETS… ―現代劇の系譜をひもとく―」シリーズのスタートでもある、イブセンの『ヘッダ・ガーブレル』でした。

それは、「近代劇の父」と称されるイブセンの作品で、私のこの仕事を何としても始めたかったからでもあります。その「JAPAN MEETS… ―現代劇の系譜をひもとく―」シリーズも、おかげさまで好評を頂きながら回を重ね、ついに第十作目となり、再びイブセンの『海の夫人』を選びました。

『海の夫人』は1888年に発表されました。

執筆順としては、『ヘッダ・ガーブレル』の一作前です。

力強く混沌とした生命の存在するところとしての海をモチーフに、あらがえないほど魂の奥底から発する意志や希求をテーマとしたこの作品は、『ヘッダ・ガーブレル』と同様、女性の奥深くに潜む大きなエネルギーを描き出し、イブセン独自の女性観が色濃くあらわれています。

私自身、以前に訪れたノルウェーの西海岸で目にした、荒々しくも包み込むような雄大な海の光景を忘れることができません。

すべての事物を柔らかに抱え込む、北欧の夏の幻想的な白夜の光とともに、理性だけではとらえ切れない『海の夫人』を作り出したいと思います。

海の夫人

アンネ・ランデ・ペータス

Anne Lande Peters

翻訳家、演劇学者。神戸生まれ、日本とノルウェーで育ち、オスロ大学と早稲田大学で日本演劇を学ぶ。三島由紀夫、岡田利規、吉本ばなななどをノルウェー語に、イブセンの『ヘッダ・ガーブレル』とヨン・フォッセの『スザンナ』（両方とも長島確との共訳、新国立劇場で2010年に上演）を日本語に翻訳。現在、オスロ大学イブセン研究センターのプロジェクト「イブセン・イン・トランスレーション」の一員として、イブセンの現代劇を次々と新たに日本語に翻訳中。オランダ在住。



長島 確

Nagashima Kaku

ドラマトゥルク・翻訳家。立教大学フランス文学科卒。P・ブルック作品の字幕操作を機に、戯曲の翻訳に取り組み始める。日本でまだ数少ないドラマトゥルクとして、コンセプトの立案から上演テキストの編集・構成まで、身体や声とともにあることばを幅広く扱う。新国立劇場では『ヘッダ・ガーブレル』『効率学のススメ』翻訳。ほかの参加作品に『アトミック・サバイバー』『4.48サイコシス』『長短調（または眺め身近め）』『グラン・ヴァカンス』『四谷雑談集＋四家の怪談』など。アートプロジェクト『墨田区／豊島区／三宅島在住アトレウス家』『長島確のつくりかた研究所』を主導。著書に『アトレウス家の建て方』、訳書にベケット『いざ最悪の方へ』。ミクストメディア・プロダクト、中野成樹＋フランケンス所属。東京藝術大学、立教大学、日本大学芸術学部、座・高円寺劇場創造アカデミー講師。



宮田慶子

Miyata Keiko

P2を参照



東海道四谷怪談

2015.6

Tokaido Yotsuyakaidan

中劇場

●前売開始：2015年4月4日（土）

作： 鶴屋南北

演出：森 新太郎

企画意図

『東海道四谷怪談』は 1825（文政8）年、江戸三座のひとつ、中村座で初演された、四世鶴屋南北の代表的な芝居です。初演以来、本家の歌舞伎は言うに及ばず、平成の今日まで、落語、現代劇、映画、テレビから絵画、漫画、アニメーションまでジャンルを越えて様々なかたちで繰り返し上演、上映され、海外の舞台人にまで多大な影響を与えています。

元禄期に実際に起きた刃傷沙汰や、巷に残る伝説などを基に、71歳の南北が『忠臣蔵』の外伝という体裁で書きおろし、初演時は『仮名手本忠臣蔵』と抱合せの形で上演されました。男女間の愛憎や人間の業、ともいえる暗部を赤裸々に描き、視覚的にも楽しませる舞台の仕掛け、今日的に言えばエンタテインメント性の高い演出、登場人物たちの活力に満ちたキャラクター創造など、いまなお観客の共感と好奇を呼び続けている人気狂言。

今回、その舞台を演出するのは、中劇場初進出となる森新太郎。2011年『ゴドーを待ちながら』、13年『エドワード二世』で豪快にして緻密な演出力を遺憾なく発揮した彼が、中劇場の空間を最大限に活かした舞台をどう創るのか今から期待が高まります。

作品

塩冶の浪人、民谷伊右衛門は自分の過去の悪行のために離縁させられていた女房、岩との復縁を舅の四谷左門に迫り、それが叶わぬとみるや、浅草裏田圃で辻斬りに見せかけ惨殺する。知らずに嘆く岩に伊右衛門は親切めかして仇討ちを誓い、それに乗じて復縁する。

民谷の家に戻った岩だが、産後の肥立ちが悪く床に伏すことが多くなり、伊右衛門はやがて疎ましく思い始めていた。そんななか、伊右衛門の隣家の伊藤喜兵衛から贈られた血の道の妙薬を飲んだ岩はたちまち相貌が崩れ悶え苦しみ、放置してあった短刀に刺さり死ぬ。これは喜兵衛の孫娘、お梅が伊右衛門に懸想し、その思いを叶えようと喜兵衛が毒を渡していたのだ。またさらに伊右衛門は家宝の薬を盗んだとして奉公人、小仏小平も殺し、岩、小平の死骸を戸板の表裏に打ち付け川に流す。

やがて、二人の怨念は伊右衛門を襲い、苦しめる。

演出家からのメッセージ

森 新太郎

これまでにふたつの『四谷怪談』を演出してきました。ひとつは韓国の劇作家による変奏バージョンで、もうひとつは朗読形式での一人芝居バージョンです。どちらの上演においてもやはり圧巻は、幽霊となったお岩の復讐の凄まじさでした。

直接的にしろ間接的にしろ、お岩は多くの人間を殺めていきます。首を打ち落としたり、川に引きずりこんだり、手拭いでくぶり殺したり、喉に喰いつき喰い殺したり。

なぜ、お岩の恨みは伊右衛門ひとりではおさまらなかったのか。お岩を死に追いやった者、社会から排除した者はいったい誰だったのか。この復讐劇に終わりはあるのか。果たしてお岩は、いつまでケラケラと笑い続けなければならないのか――。

念願かなって、中劇場という大きな空間で『四谷怪談』を演出することになりました。いま、私の脳裏にありありと浮かぶのは、広漠たる暗闇の中をあてもなく彷徨うお岩の心火です。現代に蘇るにふさわしい『四谷怪談』になればと思います。

東海道四谷怪談

鶴屋南北 (1755 ~ 1829)

Tsuruya Nanboku

江戸時代に活躍した歌舞伎作者、四代目。幼名は源蔵。

日本橋に生まれる。父の家業を継いで紺屋を営んでいたが、1777（安永6）年、芝居好きが高じて桜田治助（初代）に弟子入り。何度か名前を変えたが、82（天明2）年、勝俵蔵と改名、その間、1803（享和3）年、49歳のとき立作者となり、翌年には『天竺徳兵衛韓嘶』が大当たりし、当代の人気作家となる。11（文化8）年に四代目鶴屋南北を襲名。『東海道四谷怪談』は25（文政8）年、71歳の作。ほかには『盟三五大切』『桜姫東文章』などがある。深川で没す。



森 新太郎

Mori Shintaro

東京都出身。演出家。演劇集団円会員。

主な演出作品に『夏の夜の夢』『汚れた手』『最後の炎』（新国立劇場リーディング公演）などがあり、円では『ロンサム・ウェスト』『田中さんの青空』『孤独から一番遠い場所』『コネマラの骸骨』『ガリレイの生涯』などを演出。自身が主宰するモナカ興行でも活躍中。新国立劇場では2011年『ゴドーを待ちながら』、13年『エドワード二世』を演出。09年、毎日芸術賞演出部門・第11回千田是也賞、第64回文化庁芸術祭優秀賞受賞。

長塚圭史新作

2015.7

新 作
New Play

A New Play by Nagatsuka Keishi

小劇場

●前売開始：2015年5月17日(日)

作・演出：長塚圭史

振 付：近藤良平

出 演：近藤良平 首藤康之 長塚圭史 松たか子

企画意図

2012～13年にかけて年をまたいで上演された『音のいない世界で』につづく第二弾。

こどもも大人も一緒に楽しめるお芝居を、「鏡」をモチーフに、みなさまに向けてお届けします。「鏡」の向こうがわには一体どんな世界が広がっているのでしょうか。

前回と同様に、近藤良平、首藤康之、長塚圭史、松たか子という演劇界、ダンス界で活躍する多彩な実力派キャストが集いました。じっくりと時間をかけて話し合いやワークショップを重ね、おそろしくもあたたかい物語を、演劇ならではの趣向を凝らして創りあげます。日常を抜け出して、劇場という異界へぜひいらしてみては？

東京公演後には全国公演も予定しています。

作 品

〈鏡〉をテーマに新作を創ります。

作・演出家からのメッセージ

長塚圭史

鏡の向こう側には別の世界が広がっているということが常識であるということを御存知でしょうか。この我々にとってあまりにも当たり前の事実を題材に再びこどもとおとなのためのお芝居を作ろうかと思います。またしても松さん、近藤さんと首藤さんと私で。今回は前回よりももっともっこどもを集めなくてはなりません。そのためにはおとなが頑張らなくてなりません。そして劇場はもっともっと開かれなくてはなりません。課題は溢れかえったおもちゃ箱のようです。そう、どの課題も遊べるおもちゃであるというよろこび。海山千里を乗り越えて、今度はどんな世界が広がるのか。扉を開けたら鏡に吸い込まれる世界？ さあどうなることか。いやいや私も楽しみで仕方がないのです。

長塚圭史新作

長塚圭史

Nagatsuka Keishi

1996年、演劇プロデュースユニット「阿佐ヶ谷スパイダース」を旗揚げ、作・演出・出演の三役をこなす。平成20年度文化庁新進芸術家海外留学制度にてロンドンに一年間留学し、2011年には新プロジェクト「葛河思潮社」を始動。近年は『十一ぴきのネコ』『ガラスの動物園』『南部高速道路』『浮標』『あかいぐらやみ〜天狗党幻譚〜』『冒した者』『マクベス』を演出。朝日舞台芸術賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、読売演劇大賞優秀賞など受賞多数。新国立劇場では『アジアの女』『音のいない世界で』の作・演出を手がけている。



近藤良平

Kondo Ryohei



1996年ダンス集団「コンドルズ」を旗揚げし、全作品の構成・振付を手掛ける。北米、中南米をはじめ、世界20ヶ国以上で海外公演を行う。2004年には第4回朝日芸術賞・寺山修司賞を受賞。映画『ヤッターマン』、演劇『星の王子様』の振付ほか、ミュージカル、CM、コンサートなど幅広いジャンルで振付家として活躍。07年には『THE BEE』で役者としてデビュー、映画『ブタがいた教室』にも出演。13年には第68回国民体育大会開会式の総合演出を手がけた。近年はNHK『からだであそぼ』『サラリーマンNEO』『てっぱん』（オープニングダンス）などで注目を集める。また、女子美術大学、多摩美術大学、東京大学などで非常勤講師としてダンスの指導を行いつつ、全国各地で精力的にワークショップを行うなど多岐に渡る活動を展開している。

PLAY

公演一覧

開場記念公演～2013/2014シーズン

★=新作

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
開場記念公演	紙屋町さくらホテル★	井上ひさし		渡辺浩子	97.10/22
	[蒲田行進曲完結編] 銀ちゃんが逝く	つかこうへい		つかこうへい	97.11/13
	夜明け前	原作 島崎藤村	脚色 村山知義 補訂脚本 津上 忠	木村光一	97.12/4
	リア王	ウィリアム・シェイクスピア	松岡和子	鶴山 仁	98.1/17
1998/ 1999	虹を渡る女★	岩松 了		岩松 了	98.5/7
	幽霊はここにいる	安部公房		串田和美	98.5/12
	今宵かぎりは…★ 1928 超巴里井主義宣言の夜	竹内統一郎		栗山民也	98.6/12
	音楽劇 ブッダ★	原作 手塚治虫	脚本 佐藤 信	栗山民也	98.9/7
	THE PIT フェスティバル				
	カストリ・エレジー スタインベック「二十日鼠と人間」より	脚本 鐘下辰男		鐘下辰男	98.10/3
	神々の国の首都	坂手洋二		坂手洋二	98.10/17
	寿歌	北村 想		北村 想	98.10/29
	ディア・ライアー すてきな嘘つき	ジェローム・キルティ	丹野郁弓	宮田慶子	98.11/4
	野望と夏草	山崎正和		西川信廣	98.12/2
	新・雨月物語★	脚本 鐘下辰男		鶴山 仁	99.1/11
	子午線の祀り	木下順二	演出 観世栄夫／内山 鶴	酒井 誠／高瀬精一郎	99.2/3
	セツァンの善人	ベルトルト・ブレヒト	松岡和子	串田和美	99.5/18
	羅生門	原作 芥川龍之介		構成・演出 渡辺和子	99.6/4
	棋人 ―チーレン―	過 士行	菱沼彬晃	林 兆華	99.7/1
1999/ 2000	キーン 或いは狂気と天才	J.P.サルトル 上演台本 栗山民也／江守 徹	鈴木力衛	栗山民也	99.10/4
	美しきものの伝説	宮本 研		木村光一	99.11/4
	―森本薫の世界―				
	かくて新年は	森本 薫		宮田慶子	99.12/8
	怒濤	森本 薫		マキノノゾミ	00.1/11
	華々しき一族	森本 薫		鐘下辰男	00.2/9
	新・地獄変★	原作 芥川龍之介	脚本 鐘下辰男	鶴山 仁	00.3/23
	なよたけ	加藤道夫		木村光一	00.4/11
	夜への長い旅路	ユージン・オニール	沼澤治治	栗山民也	00.5/11
	マクベス	ウィリアム・シェイクスピア	福田恆存翻訳より 潤色 鐘下辰男	鐘下辰男	00.9/8
2000/ 2001	ブロードウェイ・ミュージカル 太平洋序曲	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジョン・ワイドマン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	00.10/2
	欲望という名の電車	テネシー・ウィリアムズ	鳴海四郎	栗山民也	00.10/20
	シリーズ「時代と記憶」				
	memorandum メモランダム★	構想・構成 ダムタイプ			00.11/27
	母たちの国へ★	松田正隆		西川信廣	01.1/10
	ピカドン・キジムナー★	坂手洋二		栗山民也	01.2/10
	こんには、母さん★	永井 愛		永井 愛	01.3/12
	夢の裂け目★	井上ひさし		栗山民也	01.5/8
	紙屋町さくらホテル	井上ひさし		渡辺浩子／井上ひさし	01.4/4
	廣作・桜の森の満開の下	野田秀樹		野田秀樹	01.6/1

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
2001/ 2002	海外招待作品 Vol.1 太陽劇団 堤防の上の鼓手	エレヌス・シクスー	字幕翻訳 松本伊瑳子	アリアヌス・ムヌーシュキン	01.9/7
	コペンハーゲン	マイケル・フレイン	平川大作	鶴山 仁	01.10/29
	美女で野獣★	荻野アンナ		宮田慶子	01.12/10
	シリーズ チューホフ・魂の仕事				
	Vol.1 かもめ	アントン・チューホフ	英訳 マイケル・フレイン 翻訳 小田島雄志	マキノノゾミ	02.1/11
	Vol.2 くしゃみ /the Sneeze	アントン・チューホフ	台本 マイケル・フレイン 翻訳 小田島恒志	熊倉一雄	02.2/28
	Vol.3 「三人姉妹」を追放されし トゥーゼンバフの物語★	岩松 了		岩松 了	02.4/1
	Vol.4 ワーニャおじさん 四幕の田園生活劇	アントン・チューホフ	小野理子	栗山民也	02.5/9
	Vol.5 櫻の園	アントン・チューホフ	潤色 堀越 真(神西清翻訳による)	栗山民也	02.6/21
	その河をこえて、五月★	平田オリザ／金 明和		李 炳熹／平田オリザ	02.6/3
2002/ 2003	海外招待作品 Vol.2 国際チューホフ演劇祭 in モスクワ ハムレット	ウィリアム・シェイクスピア		ペーター・シュタイン	02.9/7
	ブロードウェイ・ミュージカル 太平洋序曲	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジョン・ワイドマン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	02.10/11
	ノ ヤジルシ ―誘われて★	太田省吾		太田省吾	02.11/12
	シリーズ「現在へ、日本の劇」				
	①ビルグリム	鴻上尚史		鴻上尚史	03.1/14
	②浮標	三好十郎		栗山民也	03.2/19
	③マッチ売りの少女	別役 実		坂手洋二	03.4/8
	④サド侯爵夫人	三島由紀夫		鐘下辰男	03.5/26
	涙の谷・銀河の丘★	松田正隆		栗山民也	03.5/13
	ゴロヴリョフ家の人々★	原作 サルティコフ・シチェドリン	翻訳 湯淺芳子 脚本 永井 愛	永井 愛	03.6/18
	nocturne ―月下の歩行者★	構成 松本雄吉		松本雄吉	03.9/8
	夢の泪★	井上ひさし		栗山民也	03.10/9
	世阿彌	山崎正和		栗山民也	03.11/27
	シリーズ「女と男の風景」				
2003/ 2004	①海外招待作品 Vol.3 香港・劇場組合 The Game ノザ・ゲーム	ウジェーヌ・イヨネスコの悲喜劇「椅子」より 翻案 ジム・チム／オリヴィア・ヤン	字幕 角田美知代	ジム・チム／オリヴィア・ヤン	04.2/20
	② THE OTHER SIDE ／線のむこう側★	アリエル・ドーフマン	水谷八也	孫 振策	04.4/12
	③てのひらのこびと★	鈴江俊郎		松本祐子	04.5/11
	④請願 静かな叫び	ブライアン・クラーク	吉原豊司	木村光一	04.6/22
	こんには、母さん	永井 愛		永井 愛	04.3/10
	透明人間の蒸気	野田秀樹		野田秀樹	04.3/17
	ブロードウェイ・ミュージカル INTO THE WOODS	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェイムズ・ラバイン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	04.6/9
	＊胎内	三好十郎		栗山民也	04.10/4
	＊ヒトノカケラ★	篠原久美子		宮崎真子	04.10/22
	＊二人の女兵士の物語★	坂手洋二		坂手洋二	04.11/8
	喪服の似合うエレクトラ	ユージン・オニール	沼澤治治	栗山民也	04.11/16
	城★	原作 フランツ・カフカ	構成 松本 修	松本 修	05.1/14
	シリーズ 笑い				
	①花咲く港	菊田一夫		鶴山 仁	05.3/14
2004/ 2005	②コミュニケーションズ★ 現代劇作家によるコント集	作 綾田俊樹／いとうせいこう／ケラリーノ・サンドロヴィッチ／杉浦久幸 高橋徹郎／竹内 佑／鄭 義信／土田英生／別役 実／ふじきみつ彦／武藤真弓 原作使用 筒井康隆 構成・演出 渡辺えり子			05.4/8
	③箱根強羅ホテル★	井上ひさし		栗山民也	05.5/19
	④うら騒ぎ ノイゼズ・オフ	マイケル・フレイン	小田島恒志	白井 晃	05.6/27
	その河をこえて、五月	平田オリザ／金 明和		李 炳熹／平田オリザ	05.5/13
	海外招待作品 Vol.4 ベルリナー・アンサンブル アルトゥロ・ウイの興隆	イヤホンガイド翻訳 新野守広		ハイナー・ミュラー	05.6/22

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
2005/ 2006	* 黒いチューリップ／盲導犬	唐 十郎		中野敦之	05.9/27
	* 屋上庭園／動員挿話	岸田國士		宮田慶子〈屋上庭園〉 深津篤史〈動員挿話〉	05.10/31
	母・肝っ玉とその子供たち ―三十年戦争年代記	ヘルトルト・ブレヒト	谷川道子	栗山民也	05.11/28
	ガラスの動物園	テネシー・ウィリアムズ	小田島雄志	イリーナ・ブルック	06.2/9
	十二夜	ウィリアム・シェイクスピア	脚本 山崎清介 小田島雄志翻訳による	山崎清介	06.3/7
	シリーズ「われわれは、どこへいくのか」				
	①カエル＊	過 士行	菱沼彬晃	鶴山 仁	06.4/1
	*②マテリアル・ママ＊	岩松 了		岩松 了	06.4/19
	③やわらかい服を着て＊	永井 愛		永井 愛	06.5/22
	④夢の痲＊	井上ひさし		栗山民也	06.6/28
	ブロードウェイ・ミュージカル Into the Woods	作曲・作詞 スティーブン・ソンドハイム 台本 ジェイムズ・ラパイン	翻訳・訳詞 橋本邦彦	演出・振付 宮本亜門	06.5/19
	アジアの女＊	長塚圭史		長塚圭史	06.9/28
	「劇的な情念をめぐって」―世界の名作より―				
2006/ 2007	シラノ・ド・ベルジュラック	原作 エドモン・ロスタン	翻訳 辰野 隆／ 鈴木信太郎	構成・演出 鈴木忠志	06.11/2
	イワーノフ／ オイディプス王	原作 アントン・チェーホフ 原作 ソフォクレス	翻訳 池田健太郎 日本語 福田恒存 ドイツ語 ヘルダーリン	構成・演出 鈴木忠志	06.11/4
	* エンジョイ＊	岡田利規		岡田利規	06.12/7
	コペンハーゲン	マイケル・フレイン	平川大作	鶴山 仁	07.3/1
	CLEANSKINS ／きれいな肌＊	シャン・カーン	小田島恒志	栗山民也	07.4/18
	下周村 ―花に嵐のたとえもあるさ―＊	平田オリザ／李 六乙		李 六乙／平田オリザ	07.5/15
	夏の夜の夢	ウィリアム・シェイクスピア	松岡和子	ジョン・ケアード	07.5/31
	氷屋来たる	ユージン・オニール	沼澤洽治	栗山民也	07.6/18
	「三つの悲劇」―ギリシャから				
	Vol.1 アルゴス坂の白い家＊ ―クリュタイメストラ―	川村 毅		鶴山 仁	07.9/20
2007/ 2008	Vol.2 たとえば野に咲く花のように＊ ―アンドロマケー―	鄭 義信		鈴木裕美	07.10/17
	Vol.3 異人の唄＊ ―アンティゴネー―	土田世紀	脚色 鐘下辰男	鐘下辰男	07.11/14
	屋上庭園／動員挿話	岸田國士		宮田慶子〈屋上庭園〉 深津篤史〈動員挿話〉	08.2/26
	焼肉ドラゴン＊	鄭 義信		梁 正雄／鄭 義信	08.4/17
	オットーと呼ばれる日本人	木下順二		鶴山 仁	08.5/27
	シリーズ・同時代				
	Vol.1 鳥瞰図 ―ちようかんずー＊	早船 聡		松本祐子	08.6/11
	Vol.2 混じりあうこと、消えること＊	前田司郎		白井 晃	08.6/27
	Vol.3 まほろば＊	蓬莱竜太		栗山民也	08.7/14
	近代能楽集『綾の鼓』『弱法師』	三島由紀夫		前田司郎(綾の鼓) 深津篤史(弱法師)	08.9/25
	山の巨人たち	ルイジ・ピランデルロ	翻訳 田之倉稔	ジョルジュ・ラヴオーダン	08.10/23
	舞台は夢 ―イリュージョン・コミック―	ビエール・コルネイユ	翻訳 伊藤 洋	鶴山 仁	08.12/3
	シリーズ・同時代【海外編】				
2008/ 2009	Vol.1 昔の女	ローラント・シメルズフェニヒ	翻訳 大塚 直	倉持 裕	09.3/12
	Vol.2 シュート・ザ・クロウ	オーウェン・マカファーティー	翻訳 浦辺千鶴／小田島恒志	田村孝裕	09.4/10
	Vol.3 タトゥー	デーア・ローアー	翻訳 三輪玲子	岡田利規	09.5/15
	夏の夜の夢	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 松岡和子	ジョン・ケアード	09.5/29
	現代能楽集 鶴＊	坂手洋二		鶴山 仁	09.7/2

＊ =THE LOFT 公演

シーズン	演目	作	訳・脚色	演出	公演初日
2009/ 2010	ヘンリー六世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	
	第一部 百年戦争				09.10/27
	第二部 敗北と混乱				09.10/28
	第三部 薔薇戦争				09.10/29
	象	別役 実		深津篤史	10.3/5
	東京裁判三部作	井上ひさし		栗山民也	
	夢の裂け目				10.4/4
	夢の泪				10.5/6
	夢の痲				10.6/3
	エネミイ＊	蓬莱竜太		鈴木裕美	10.7/1
2010/ 2011	【JAPAN MEETS… ―現代劇の系譜をひもとく―】				
	I ヘッダ・ガーブレル	ヘンリック・イブセン	翻訳 アンネ・ランデ・ペータス 長島 確	宮田慶子	10.9/17
	II やけたトタン屋根の上の猫	テネシー・ウィリアムズ	翻訳 常田景子	松本祐子	10.11/9
	III わが町	ソーントン・ワイルダー	翻訳 水谷八也	宮田慶子	11.1/13
	IV ゴドーを待ちながら	サミュエル・ベケット	翻訳 岩切正一郎	森新太郎	11.4/15
	焼肉ドラゴン	鄭 義信	翻訳 川原賢柱	鄭 義信	11.2/7
	鳥瞰図 ―ちようかんずー	早船 聡		松本祐子	11.5/10
	雨	井上ひさし		栗山民也	11.6/9
	おどくみ＊	青木 豪		宮田慶子	11.6/27
2011/ 2012	【美×劇】 ―滅びゆくものに託した美意識―				
	I 朱雀家の滅亡	三島由紀夫		宮田慶子	11.9/20
	II イロアセル＊	倉持 裕		鶴山 仁	11.10/18
	III 天守物語	泉 鏡花		白井 晃	11.11/5
	パーマ屋スミレ＊	鄭 義信		鄭 義信	12.3/5
	まほろば	蓬莱竜太		栗山民也	12.4/2
	負傷者16人 ―SIXTEEN WOUNDED―	エリウム・クライエム	翻訳 常田景子	宮田慶子	12.4/23
	【JAPAN MEETS… ―現代劇の系譜をひもとく―】				
	V サロメ	オスカー・ワイルド	翻訳 平野啓一郎	宮本亜門	12.5/31
	VI 温室	ハロルド・ピンター	翻訳 喜志哲雄	深津篤史	12.6/26
2012/ 2013	リチャード三世	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 小田島雄志	鶴山 仁	12.10/3
	【JAPAN MEETS… ―現代劇の系譜をひもとく―】				
	VII るつぽ	アーサー・ミラー	翻訳 水谷八也	宮田慶子	12.10/29
	音のいない世界で＊	長塚圭史	振付 近藤良平	長塚圭史	12.12/23
	長い墓標の列	福田善之		宮田慶子	13.3/7
	With ―つながる演劇―				
	ウェールズ編 『効率学のススメ』＊	アラン・ハリス	翻訳 長島 確	ジョン・E・マグラー	13.4/9
	韓国編 アジア温泉＊	鄭 義信	翻訳 朴 賢淑	孫 振策	13.5/10
	ドイツ編 つく、きえる＊	ローラント・シメルズフェニヒ	翻訳 大塚 直	宮田慶子	13.6/4
	象	別役 実		深津篤史	13.7/2
2013/ 2014	Try・Angle ―三人の演出家の視点―				
	Vol.1 OPUS / 作品	マイケル・ホリンガー	翻訳 平川大作	小川絵梨子	13.9/10
	Vol.2 エドワード二世	クリストファー・マーロウ	翻訳 河合祥一郎	森 新太郎	13.10/8
	Vol.3 アルトナの幽閉者	ジャン＝ポール・サルトル	翻訳 岩切正一郎	上村聡史	14.2/19
	【JAPAN MEETS… ―現代劇の系譜をひもとく―】				
	VIII ビグマリオン	ジョージ・バーナード・ショー	翻訳 小田島恒志	宮田慶子	13.11/13
	マニラ瑞穂記	秋元松代		栗山民也	14.4/3
	テンペスト	ウィリアム・シェイクスピア	翻訳 松岡和子	白井 晃	14.5/15
	十九歳のジェイコブ＊	原作 中上健次	脚本 松井 周	松本雄吉	14.6/11
	永遠の一瞬 ―Time Stands Still―	ドナルド・マーグリーズ	翻訳 常田景子	宮田慶子	14.7/8

Memo
